

# 北野天満宮所蔵青磁貼花牡丹唐草文花瓶の朱漆銘と修理

尾野善裕

はじめに

京都市立博物館では、毎年京都に所在する古社寺が所蔵している古文化財の調査を行っている。平成九年度に調査の対象となったのは北野天満宮で、その調査の際に筆者は鏝で補修された青磁貼花牡丹唐草文花瓶一個を実見する機会を得た。この青磁花瓶は、器高が五〇・四cmある大型のもので、胎土・釉調・焼成から判断して、中国浙江省にある龍泉窯の産と推定されるものである（図版17）。全体のプロポーションや文様は、鎌倉の称名寺が所蔵する青磁貼花牡丹唐草文花瓶一对とよく似ている。また、やや小振りのものではないが、類品が至治三年（一二三三）の紀年木簡などと共に韓国の新安沖海底沈船から引き揚げられており、一般に南宋から元時代のものと考えられている。

同種の青磁花瓶の伝世例は必ずしも少なくないが、北野天満宮所蔵のものが特に注目されるのは、「豊太閤修理ヲ加フ」との伝承を

もつことと、底部に朱漆で「天正十一癸未年」（一五八三）の銘が施されていることにある。そこで本稿では、この青磁花瓶の詳細について報告すると共に、銘文と花瓶の補修状況の検討を通して、伝承についていささかの考察を加えてみることにしたい。

## 一 北野天満宮所蔵青磁貼花牡丹唐草文花瓶の詳細

この青磁花瓶は、古代中国の青銅器（尊）との形態的類似性から、尊式花瓶と呼ばれている形状のものである。喇叭状に広がる頸部の側面には牡丹折枝文、球形の胴部には牡丹唐草文の型押し貼花をもち、脚部には鎬蓮弁文が彫り出された、いわゆる浮牡丹手の花瓶である（挿図1）。全体の高さは五〇・四cm、口径は二一・三cm、高台径は一六・〇cmある。外面のほぼ全面に青磁釉が施されているが、高台の畳付とその脇のみ釉が削り取られて露胎となっている。朱漆銘は、この露胎部分に施されており、剥落が著しく読みづらいが、「□白 天正十一癸未年□月吉日 施□」と判読できる（挿図2

く4)。口縁部は大きく破損しており、鏝二六個を用いて破片を繋ぎ合わせているが、口縁部の一片のみ釉調が異なっており、この部分は呼び継ぎされているものと考えられる(挿図5)。呼び継ぎ部分の外面には直径約1・1cmの円形印が焼成前(釉下)に押捺されており、丸枠内には「永樂」の二文字を読み取ることができる(挿図6・7)。

青磁花瓶には、カヤもしくはヒノキ製とみられる白木の箱が伴っており、箱の蓋の表には、

「龍泉窯繡花文花瓶」

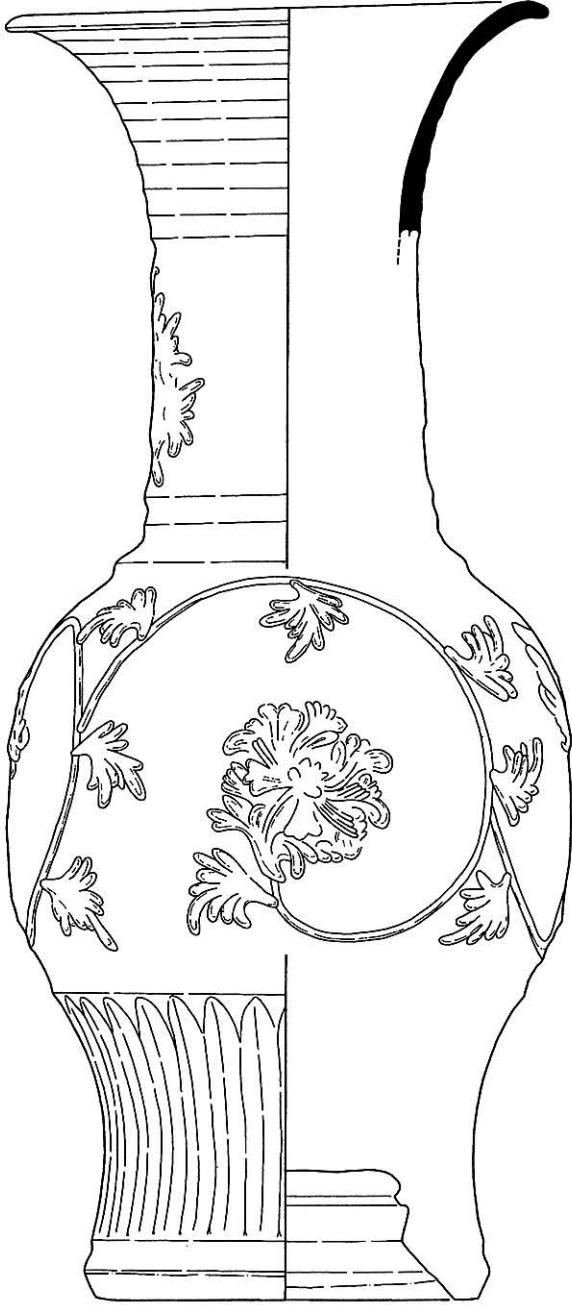
蓋裏には、

「底ニ朱漆銘有

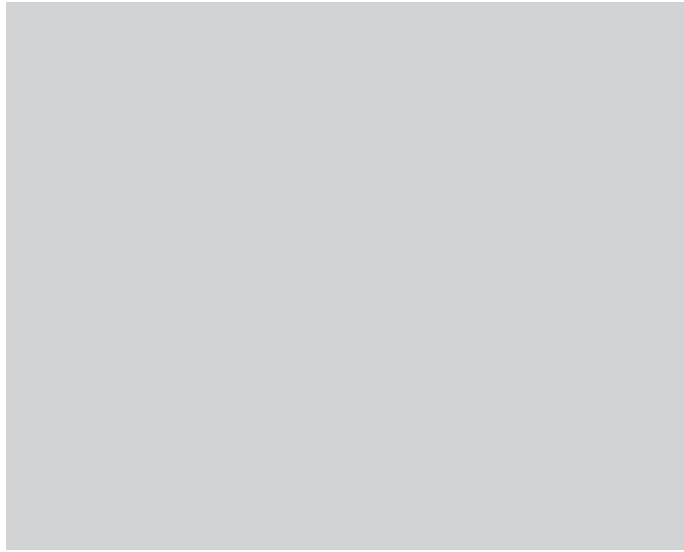
□□□□□□□□閔白

天正十一癸未年□月吉日施□」

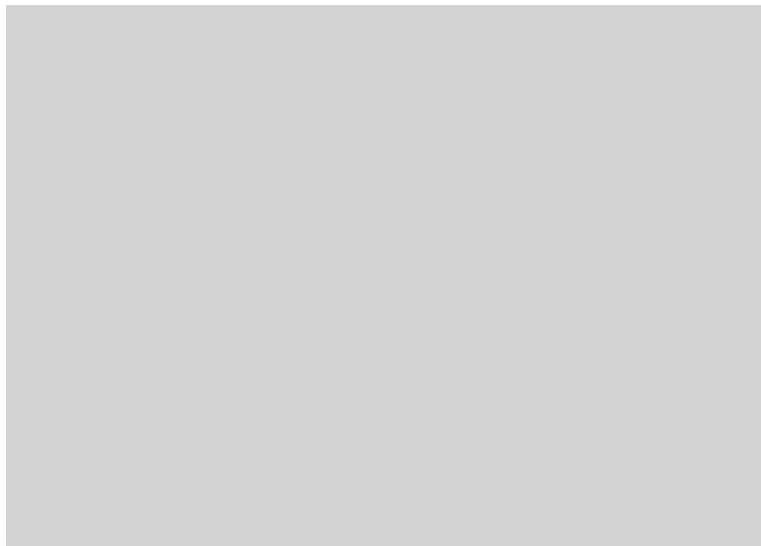
と墨書されている。また、昭和一四年四月に作成された北野天満宮の『什物目録』には、この青磁花瓶について「青磁大花瓶 一個 豊太閣修理ヲ加フ」と記載されている。



挿図1 北野天満宮所蔵青磁貼花  
牡丹唐草文花瓶(S=1:3)



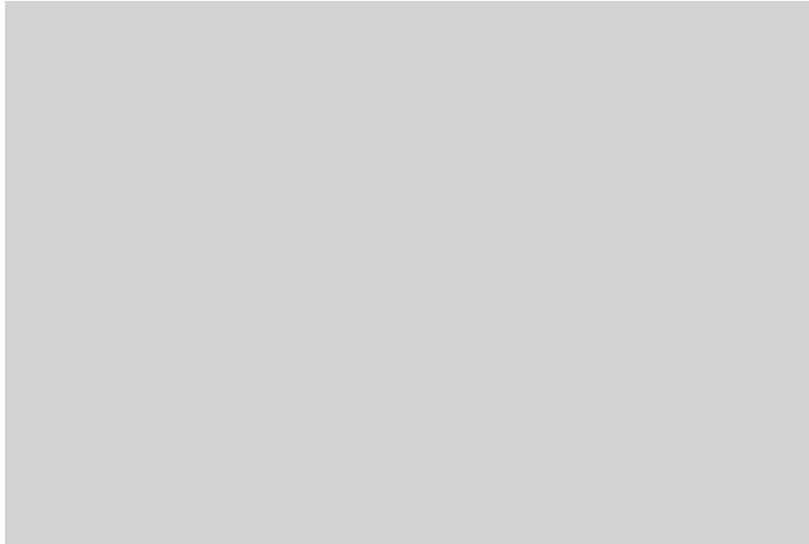
挿図 2 高台の朱漆銘



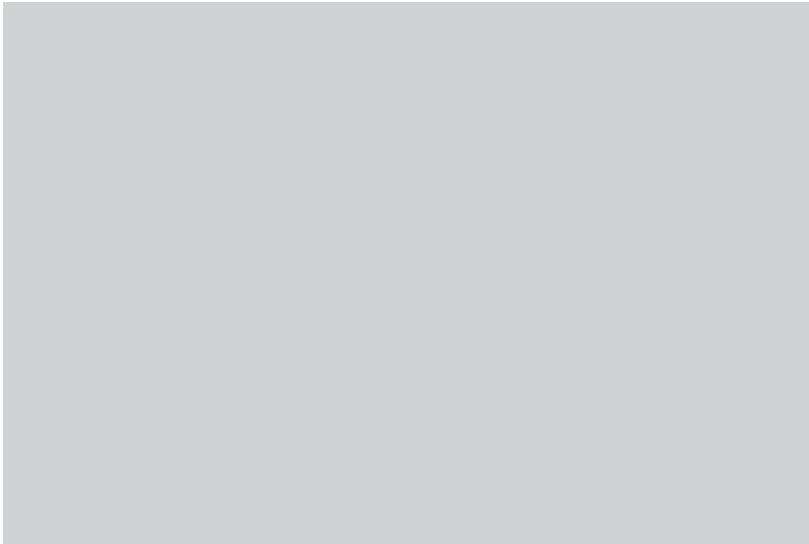
挿図 3 高台の朱漆銘



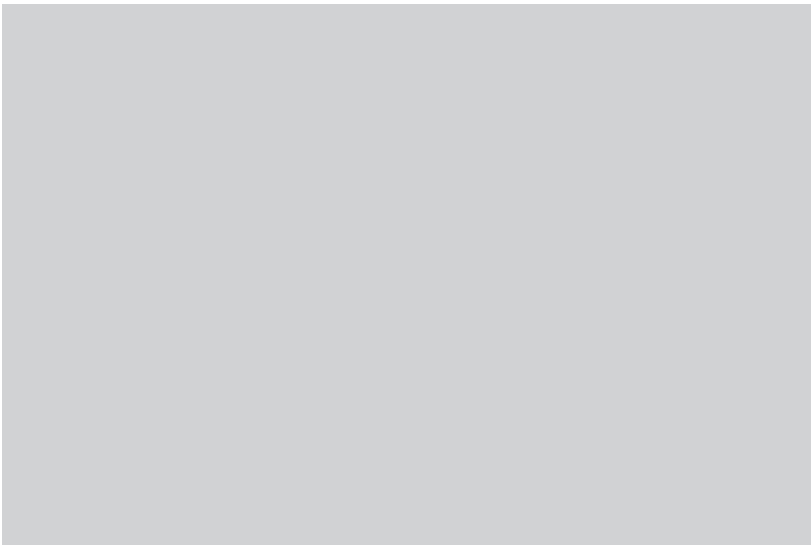
挿図 4 高台の朱漆銘（部分）



挿図 5 口緑部の補修状況



挿図 6 呼び継ぎ部分



挿図 7 呼び継ぎ部分

## 一一 朱漆銘の解釈

さて、この青磁花瓶を豊太閤すなわち豊臣秀吉が修理させたという伝承だが、これは現時点では昭和一四年に作成された北野天満宮の『什物目録』の記事としてのみ確認されるもので、『什物目録』には「豊太閤修理ヲ加フ」と記されているに過ぎないため、その典拠は明確ではない。そして、この記事を除いてしまうと、蓋裏の箱書の「関白」の二文字以外に青磁花瓶と秀吉との関わりを推測させる材料は全く見当たらないため、敢えて想像を逞しくするならば、『什物目録』の記事がこの箱書を根拠に書かれた可能性も十分に考えられる訳である。

しかし、蓋裏の箱書のように青磁花瓶の朱漆銘を読み下したとしても、実は「関白」の二文字を秀吉と結び付けて理解することは難しい。何故なら、秀吉が従一位に叙せられ、関白に就任するのは天正一三年（一五八五）七月のことであり、朱漆銘の紀年が天正一一年（一五八三）である以上、関白と記されているならば、それは秀吉以外の人物を指すものと考えなければならぬからである。

では、青磁花瓶の高台部分の朱漆銘は一体何を意味するものなのであろうか。改めて朱漆銘自体に検討を加えてみよう。まず銘文の読み下しであるが、先にも述べたように、筆者が実見した際には、箱書の読み下し案で「□□□□□□関白」とされている銘文の冒頭部分には、少なくとも「□白」の二文字が書かれていたであろうこと以上の判読は困難であった。この差は、朱漆銘が経年劣化し、剥落していく過程で読みにくくなったことに起因するものである可能

性もある。しかし、箱書でも不明字となっているものが多いことを考えれば、箱書が書かれた時点で既に銘文はかなり読みづらくなっていたと考えられ、「□□□□□□関白」という読み下しが誤読である可能性も完全には否定しがたいのではないかと思われる。

そこで、一旦箱書の読み下し案については保留しておくこととし、現状で確認できる「□白 天正十一癸未年□月吉日 施□」という文字から銘文が意味していることを考えてみることにしよう。まず、末尾の「施□」の語句であるが、これは「施入」など神社への奉納を意味する文言ではなからうか。社宝として永く北野天満宮に伝わってきたものであることを考えると、銘文が書かれている青磁花瓶が奉納品であった可能性はかなり高く、そうした物品に奉納を意味する文字が記されていることは何ら不思議ではない。さらに、この朱漆銘を奉納銘と見做すことができるならば、銘文冒頭の「□白」は奉納銘に用いられることの多い「敬白」の文言ではないかとの推測も可能になる。つまり、朱漆銘は天正一一年に青磁花瓶が奉納されたことを記したものと考えることができるのではなからうか。

そうだとすれば、この朱漆銘から判ることは、奉納に関する事項、それも奉納された年だけであって、修理に関する情報をここから読み取ることが困難である。従って、「豊太閤修理ヲ加フ」との伝承については、銘文からは如何とも判断を下しようがないと言わざるを得ないのである。

### 三 修理部分の検討

前段での検討結果から、青磁花瓶の朱漆銘は北野天満宮への奉納時に記されたもので、口縁部の修理とは必ずしも関係しない可能性があることが判った。そこで、次に修理部分自体の状態の検討から、『什物目録』に記された秀吉による修理の伝承について考えてみることにしたい。

まず、修理に用いられている二六個の鏝であるが、肉眼で観察する限り全て同形・同大・同質で、複数回の修理に伴うものとみるよりは、全部が一度の修理で打ち込まれたものと考えるほうが妥当であると考えられた。次に接合されている破片であるが、呼び継ぎと考えられる部分に凹形印が押捺されていることは、前述のとおりである。凹形印は、焼成前の押捺であるにも拘らず、呼び継ぎ部分のほぼ中央に凹つたように押されており、こうしたあり方は呼び継ぎ部分の陶片が他の陶磁器の破片からの流用ではなく、この青磁花瓶の補修用に意図的に作成されたものであることを窺わせる。

ところで、この呼び継ぎ部分の陶片に捺されている凹形印からは、「永樂」の文字を読み取ることができ、類似の印影は京焼の陶工として著名な永樂善五郎の作品の中に見出すことができる。中でも平成六年（一九九四）に石川県立美術館で開催された「特別陳列 古九谷・再興九谷名品展―永樂和全―」に出品された交趾写蟹菊形香合の高台内の印影とは酷似しており、同一印の印影である可能性が極めて高い<sup>1)</sup>。この交趾写蟹菊形香合には、「於九谷和全（花押）造」との自筆署名をもつ共箱が伴っているから、北野天満宮所蔵の青磁

花瓶の呼び継ぎ部分の印も永樂善五郎家一二代和全の用印ではないかと考えられる。

これらの事実から、北野天満宮所蔵の青磁花瓶の呼び継ぎ部分は、永樂和全の製作にかかるものであると考えられ、この陶片も修理用の鏝で繋ぎ合わされていることを考え併せれば、花瓶が修理されたのは和全の生年である文政六年（一八二二）を遡ることはありえない筈である。また陶片が、北野天満宮所蔵の青磁花瓶のために特別に造られたものであるらしいことを考慮すれば、呼び継ぎ部分が製作されてから、鏝によって青磁花瓶が修復までの間に、大きな時間差を想定することも難しいのではなからうか。従って、青磁花瓶が修理されたのは、永樂和全の陶工としての活動時期である幕末から明治期、一九世紀の中葉から後半頃のことと考えられよう。

さて、実際の修理者と修理時期の推測ができた訳だが、永樂和全がこの青磁花瓶を修理するに至った経緯については、朱漆銘や箱書には何も記されていない。もともと、豊臣秀吉によって北野大茶会が催されて以来、北野天満宮は茶湯と縁の深い神社であり、千家十職の一つに数えられている永樂善五郎家と天満宮の間に、何らかの関わりがあったとしても驚くには当たらないだろう。京都国立博物館が所蔵している永樂得全作紫交趾釉牛置物（G乙一四〇―五八）の共箱箱書には、

「鴻家炉峯君御好のおき物十二之内

再製御蔵品南紀御庭焼紫交趾

大獅子おき物紫葉

明治四十二年己酉五月廿五日

焼印ハ北野神社御印也

扶桑陶工 永樂善五郎」

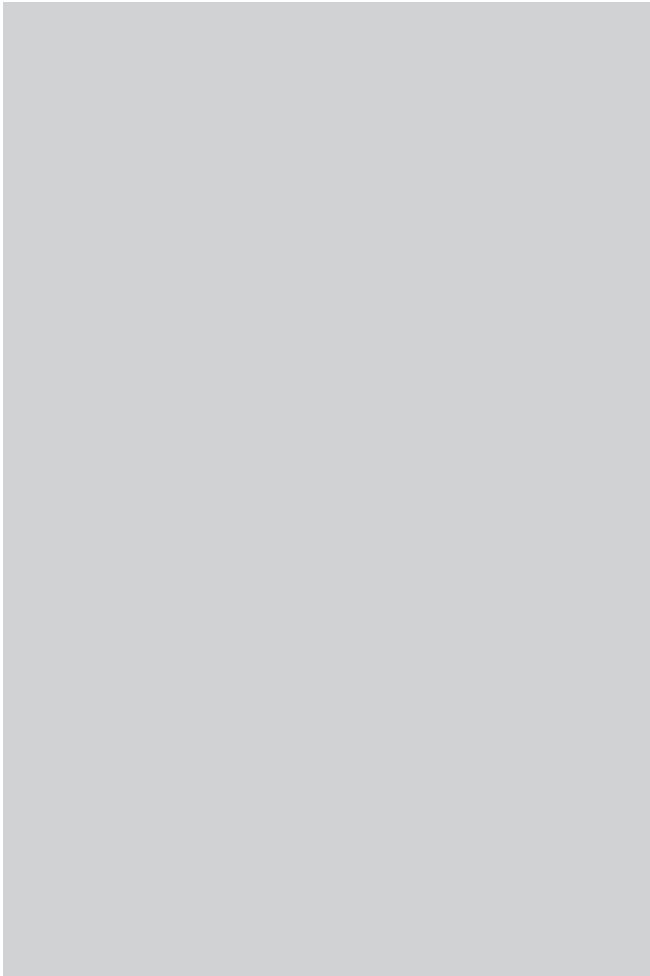
と記されている(挿図8)。ここでも、何故得全が北野天満宮(北野神社)の焼印を用いているのかは詳らかではないが、得全と北野天満宮の間に神社と一般の参拝者以上の関係があったらしいことは読み取れる。恐らく、実子得全と北野天満宮との間に存在したのと同様の関係が、和全との間にもあり、そうした関わりの中で青磁花瓶の修理もなされたのではなからうか。

#### まとめ

以上、述べてきたことをまとめると、この青磁花瓶が豊臣秀吉に

よって修理されたという昭和一四年の『什物目録』の記事を裏付ける材料は、残念ながら現時点で収集しえた情報の範囲内には見当たらなかった。むしろ銘文と補修部分の検討結果は、青磁花瓶が天正一一年に奉納され、幕末か明治時代頃に永樂和全によって修理された可能性が極めて高いことを示している。和全が、秀吉の没後二〇〇以上経ってから後の生まれであることを考えれば、秀吉が和全に修理を命じたり依頼することは困難と判断せざるをえない。従って、青磁花瓶を秀吉が修理させたという『什物目録』の記事とは齟齬を生じることになる。

もっとも、『什物目録』の記載に誤りがあったとしても、この青磁花瓶が秀吉とは全く無縁のものであったと決めつけることはでき



挿図8 永樂得全作紫文趾牛置物の箱書

ないだろう。銘文から推測される奉納時期が天正一一年であり、ちようど秀吉の活躍時期に当たっていることを考えれば、青磁花瓶の奉納者が秀吉であった可能性が考えられるからである。あるいは、秀吉奉納の青磁花瓶として伝えられていたものが、時間を経る過程で秀吉ゆかりの花瓶、秀吉修理の花瓶へと誤り伝えられ、最終的に『什物目録』の記事となった可能性もあるだろう。秀吉が天満宮の神域で北野大茶会を催したのは天正一五年（一五八七）のことであるが、両者の結びつきが、天正一一年まで遡るとすればありえない話ではない。ただ残念ながら、現在見出すことができない史・資料の中に、そうした事実の有無を明示しているものは見当たらない。新たな史・資料が発見されることに期待したい。

本稿の執筆・掲載に当たっては北野天満宮宮司の梶 季嗣様・禰宜の湯浅典男様から格別の御配慮を賜った。文末ではあるが、明記して深謝の意を表したい。

〈註〉

- 1 石川県立美術館『特別陳列 古九谷・再興九谷名品展―永楽和全―』（展示パンフレット）一九九四年
- 2 北野天満宮は、明治時代に官弊中社北野神社となっている。